

わたしのほんご後日談



黒羽 鈴木 和雄

「わたしのほんご——南米の子供のための教科書を」という本誌昨年二月号の「地区のたより」をご記憶の方があると思います。その事業の一年後の経過をご報告いたします。

中南米には、日系児童を中心に約一〇万人の子どもたちが熱心に日本語を学んでいます。当地区ロータリー財団奨学生だった白鳥幸子さんは、商社員のご主人と結婚されて、十年前にご一緒にペルーへ赴任しましたが、現地の日系人が親も子も日本語が話せなくなっているのにビックリしました。日本経済の成長とともに日本語熱は高まる一方ですが、日系人が七万人もいるペルーを例にとっても、その七割を占める三〜四世はまったく日本語がだめ。そこで、現地の大使館の依頼で「外国語としての日本語教科書」を編さんすることになりました。

「笠地蔵」という話が有りますが、外国人として成長した現地三〜四世には「笠」がまったくわからない。ですから、日本政府が文化政策と

して送る国語教科書の評判は甚だ芳しくありません。それに反して、生きた言語感覚と遊びの要素をたっぷり取り入れた白鳥さんの教科書はさし絵、テープ、指導書等をダイナミックに駆使した「楽しい教科書」としてシラトリ・メソッドといわれ、注文が殺到したそうです。

帰国されてからも、この教科書を送って欲しいという要望が高いので、今回は全十二巻を四巻にまとめ、そのうち三巻はすでに出版したのですが第四巻を作る七百余万の資金に行き詰まってしまうました。そこで二五五地区の瓜生英二PGと二五六地区の西村二郎PGの提唱により、両地区内全会員一人五〇〇円を拠出し、三〇〇余万円ができました。後の半額はロータリー財団の特別補助金をとRIに申請したのですが、これはとうとう駄目だったそうで、今年度両地区で再度拠金をして、目標の七〇〇余万円を生み、事業完遂の目途がついたわけです。

白鳥さんは、この貴重な資金をさらに有効に活かすため、第四巻を次に回して、前三巻の補助教材一式を今年中に千部作りたいたいと思っています。これは、表に写真や絵、裏に言葉が印刷された大形のカード三百枚にケース、指導書等がセットになった新しい教材だそうですが、元「友」委員長の故佐久間長吉郎さんが終始お力になって下さったことを申し添えておきます。

西村PGが三五五地区（今の二五五・二五六地区）のガバナーの時、財団奨学生として、宇都宮からアメリカへ行かれた白鳥さんの今日の

活躍を見るにつけ、なぜ、財団奨学生が、彼女のようにロータリアンの子女ではないのだろう。そして、財団への貢献度が高い日本のロータリークラブになぜ、特別補助金の恩恵が薄いのだろうかと思うのです。

（第二五五地区 栃木県 歯科医）